

長野のユースの環境意識調査（2013年）報告書

NPO みどりの市民

2013年8月31日

要 旨

環境教育の効果的かつ適切な開発のために、長野の3高校と信州大学工学部・教育学部において、高校生と大学生（以下ユースと略す）に対し、環境意識アンケートを実施した。アンケート項目は1. 環境の現状と将来の認識、2. 環境価値観、3. 環境実践、4. 環境教育の経験と効果、5. 環境改善の主体、6. 環境改善への意欲と自信、でアンケートを短時間でおこなうために総計40項目とした。高校生1181名、大学生652名、総計1833名から回答を得て、集計した。これらの集計結果を、1996年の国際的な環境意識調査の日本人高校生の資料、および環境省が近年調査している国民の環境意識調査の若者（20代）の資料と比較検討し分析することで、以下のような長野のユースの環境意識についての特徴がわかった。

1. 環境の現状と将来の認識： 「悪化している」が「良くなっている」の倍以上あり、環境の現状には悲観的である。長野よりもより広域になるほどその現状は悲観的である。将来予測については悪化するが多いが、改善も増加しており予測が両極化する傾向があった。
2. 環境価値観： 人間にとって技術・経済と自然・環境のどちらを重視するかを問う14問を設定した。自然や環境保全を肯定する意見は8問で得られたが、他の6問では判断できないとの意見が多く、科学や技術の人間生活における功罪について判断しえておらず、今後はこれらの学習が求められる。
3. 環境実践： 環境行動の実践を問う10問では、リサイクルと節水の2問での実施率は半数以上で高かった。しかし、大半の項目では、今後やろうと思うが多く実践の必要性と意欲は高かったが、集会参加や植林活動など社会参加への意欲はいぜん低調であった。
4. 環境教育の経験と効果： 小中学校での環境教育経験は高いが、大半は年数回であった。それでもそれらによる実践や環境教育を肯定する意見は90%と高かった。
5. 環境改善の主体： 国民全体であるとする意見が57%と高く、長野のユースの認識は全国平均よりも高く、期待できる。
6. 環境改善への意欲と自信： 環境改善を望む意見は98%にもなるが、その基礎力である環境改善への自己肯定力については85%にとどまっている。

自然・環境の抽象的な保全については肯定的であるが、人間生活との関連で理解されていないので技術など具体的に問われると判断できなくなる傾向がある。科学、技術の特性やその人間生活への功罪を学習することが必要である。また、節水や節電など個人的な環境実践の割合は高いが社会的な参加は少ないので、それらの事例や参加による効果などを提示することが必要だろう。小中学校での環境教育はかなり実践され、効果的なので、学校ではそれらをさらに明示的にこなう必要があるだろう。環境改善への高い意欲を実践につなげるためには身近にできる実践や社会参加の事例を提示し、自己肯定感を高めることが必要である。

はじめに

地球温暖化などの環境問題は 21 世紀の重要課題となっている。それらの解決のためにはなにより環境教育が必要とされるが日本においては必ずしも十分には実施されているとはいえない。特に将来を担う若者への環境教育はより重要性を増しているが、環境教育を効果的に進めるためには対象者の環境意識を十分に理解したうえで、適切な教材の開発が必要である。今回はそのため長野の高校、大学生（以下ユースと総称する）を対象にその環境意識を探るためのアンケート調査を実施した。

本調査は、北信地域の 3 高校と信州大学の教育学部と工学部において教員により本アンケートの実施と回収がおこなわれた。ご協力いただいた関係各位にあつく感謝申し上げます。アンケート作成および分析の主たる資料とした「アジア・太平洋地域における青年の環境意識調査」についてご教示と関係資料をご提供いただいた市川智史・滋賀大学教授に深く感謝申し上げます。また、本調査への資金提供をいただきました(株)長野都市ガス様にお礼申し上げます。

調査の方法

1. アンケートの作成

個人によって多様な環境意識を調査するにあたっては新たにアンケート項目を作成するのではなく、対象間の比較や客観性を確保するために既存の意識調査を参考にした。これまでに多様な意識調査が高校生や大学生に対しておこなわれてきているが（花田 2006、玉井・味楚 2005 など）、ここでは以下の二つの資料を活用してアンケートを作成した。

・アジア・太平洋地域における青年の環境意識調査： 1996 年にアジア太平洋地域 10 カ国の 16 歳を対象に、環境に対する意識の国際的比較をおこなうために実施された調査、研究である。アンケートは大きくは 28 問であるが、環境価値観を問う対比的な設問では 12 もの下位設問があり、それらを合計すると 94 項目にもなる。また、回答の方式も単一選択や任意数の選択、環境知識の正答を問うもの、5 段階の意識程度を問うものなど多彩であり、全てを回答するにはかなりな時間を要するものとなっている。日本では東京都内の 8 つの高校 1 年生に対して実施され、1161 名のデータが得られ、分析、報告がなされている (Barrett B., Abe O., Harako E. & Ichikawa S. (2002). Japan. In *Young People and the Environment, An Asia-Pacific Perspective*. Kluwer Academic Publishers. London: pp.9-22.)。体系的かつ国際比較の報告がなされている調査であり、本調査の主たる参考とした。しかし、回答時間の関係から上記 94 項目のうち、20 項目のみをアンケート項目として使用し、比較分析の対象とさせていただいた。

・環境省「環境にやさしいライフスタイル実態調査」：環境省では環境改善の政策推進のために広く国民の環境意識アンケートを実施し、その結果を公表している。今回のアンケート作成にあたっては 2010 年度に実施された調査報告書に基づき、地域、国、地球レベルでの環境状況についての実感を問う項目を使用し比較分析の対象とさせていただいた。本調査では年代別に集計結果が示されているので、今回の調査分析にあたっては 20 代の資料を使用した。

上記 2 点の資料による以外に、3.11 後の時代性を考慮し、原発課題と長野で関心が高いと思われる地産地消に関する 2 項目を追加した。

事前の依頼による調査協力者は北信の 3 高校と信州大学の教育学部、工学部の教員であり、高校生、

大学生に対するアンケート時間を十分にはとれないので、10～15分と短時間にする必要があり、アンケート数はかなり限定することにした。

比較のための資料とアンケート可能時間を考慮して、アンケートは以下の全40問とした(附表)。Q1～3は回答者の属性、Q4～6は地域・国・地球環境の現状の認識、Q7～20は環境価値観の対比的な判断、Q21～30は環境配慮行動の実践の程度、Q31は環境改善の主体、Q32～35は環境教育の経験と意義、Q36～38は地域・国・地球環境の将来の予測、Q39～40は環境改善への意欲と意志、をそれぞれ問うものである。

本調査に先立ち学生に試行したところ40問の回答に要する時間はほぼ10分で、回答者への負担感は少なかった。

2. アンケートの実施

アンケートは紙による配布で無記名とし、以下の各学校にて協力者により実施され、回収された。

- ・ 信州大学教育学部の1年生250名は授業「環境教育」が必修であり、そのガイダンス時(6月)に本アンケートを実施、回収した。また、4年生の1授業においても実施された。
- ・ 信州大学工学部では協力教員3名により、環境機能工学科および建築学科、機械工学科を主に対象にした授業時(5月)にアンケートを実施した。
- ・ 長野市立長野高校では生徒会により全生徒対象にアンケートが実施された(6月)。
- ・ 飯山北高校では1年生全員にアンケートが実施された(7月)。
- ・ 長野商業高校では全生徒にアンケートが実施された(8月)。

3. 集計および解析の方法

各学校よりのアンケート回答をエクセルに入力し、集計した。結果は高校と大学とに2大別して集計し、さらに上記国際、国内の2調査資料との比較をおこない、時代の変化(1997年)や長野と全国(2013年)との差異などを分析し、検討、検討した。これらは主に信州大学教育学部環境教育研究会によっておこなわれた。

結果と考察

・アンケートの回収数

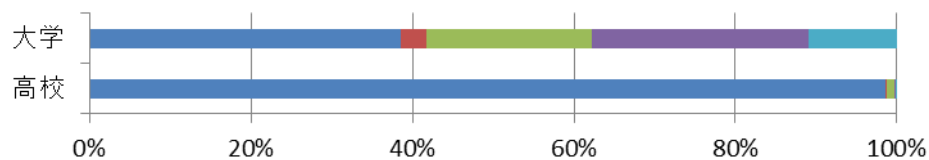
アンケートを実施し、回収できたのは飯山北高校153名、長野市立長野高校402名、長野商業高校626名の3高校名と信州大学の教育学部(1年と4年生)310名、工学部(1～4年生)342名の2学部652名の総計1833名であった。

・各問の集計結果および考察

以下に各アンケート項目毎にその回答割合(%)を高校生と大学生別に図示し、さらに過去の国際調査(1996年と図示した)や環境省の全国調査(2010年と図示した)と同じアンケートの場合は図に追記して、比較検討し、考察をおこなった。

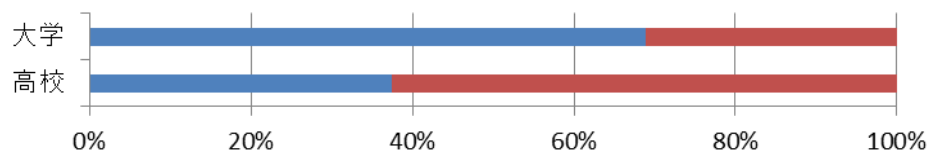
1. 回答者の属性

Q01 出身地：①長野県・②北海道東北・③関東甲越・④東海北陸・⑤関西中国・⑥四国九州



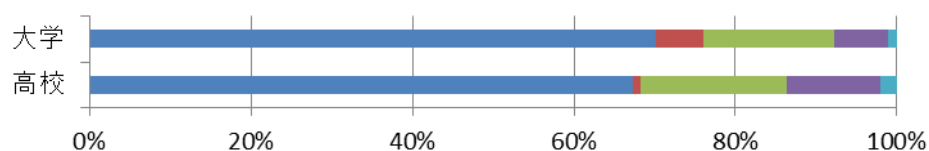
* 高校生は当然 99%が長野県内者である。しかし、信州大学では県内者は 37%であり、全体での県内率は 65%になる。高校生に限ればほぼ長野県内者の意識調査といえる。

Q02 性別：①男・ ②女



*高校では女性が多く、大学では男性が多いが、全体ではほぼ同数であり、以下の結果および考察に性による偏りはないものとする。

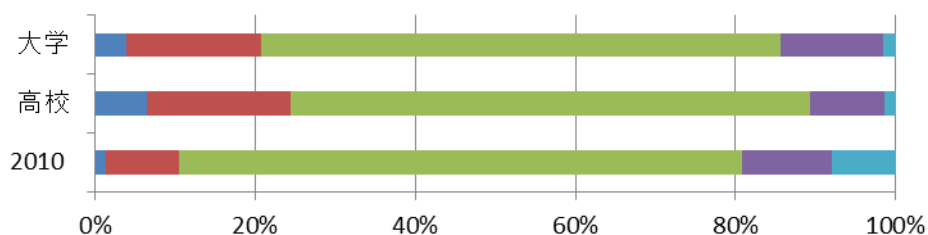
Q03 小・中学生時代の主な生活環境：①住宅地 ②商工業地 ③農村 ④山村 ⑤その他



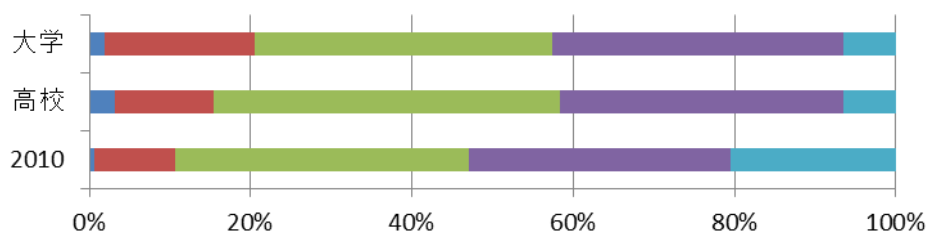
*生活環境は高校生でも大学生でも住宅地が 65%と 70%で、街的な生活環境が大半であることがわかる。

2. 環境状況についての近年の実感： 環境の現状認識は改善への意欲を引き出すための基礎であり、将来予測とともに重要な項目である。以下回答は、① よくなっている ② ややよくなっている ③ 変わらない ④やや悪化している ⑤かなり悪化している、の5択である。

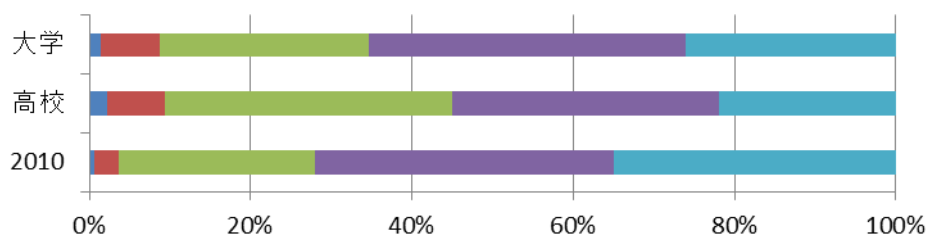
Q04 地域レベル (長野市)



Q05 国レベル (日本全体)



Q06 地球レベル (世界全体)

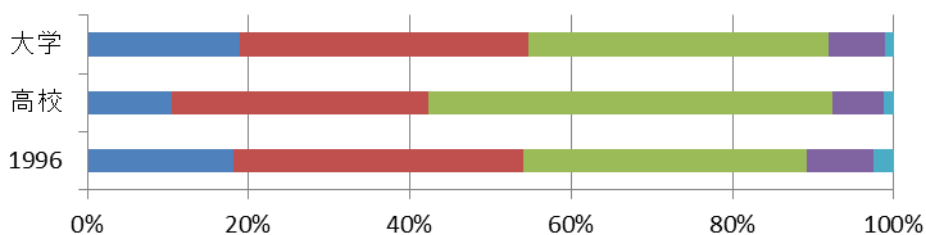


*各レベルでは「変わらない」が最多であるが、広域の地球レベルになるほどより悪化していると感じている。地域レベルでは「良い」が「悪化」よりも多いが、国、地球レベルになると後者が圧倒的に多くなり、全体として悲観的であるといえる。それらの割合は高校生と大学生とではほぼ同じ傾向でありユース全体の実感なのであろう。

環境省調査の全国の20代との比較では、地域レベルでは「良くなっている」が全国で10%なのに対して長野では22%であり、長野の環境はかなり良いとのイメージを持っていることがわかる。環境省の経年調査では近年ほど悪化の意識が高くなっているというが、本調査を継続することで長野のユースの意識変化を測る必要もあるだろう。

3. 環境価値観： 相反する対照的な価値を提示することでユースがどのような価値意識をもっているのかを問うもので、本アンケートの中心項目である。以下回答は、①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成、の5択である。

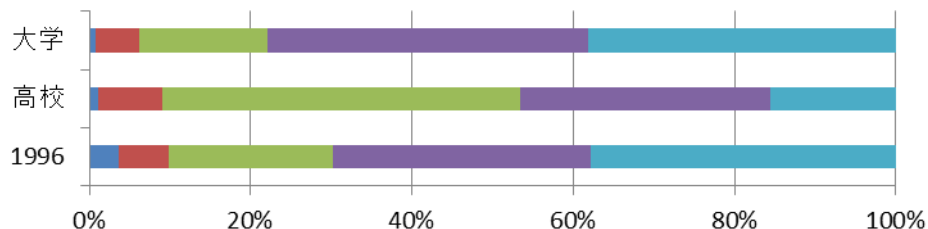
Q07 科学と技術が私達の生活を良くした VS 科学と技術が私達の生活を悪くした
 ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*科学・技術の評価を問う項目である： 1996年調査では肯定的が多いが本調査時の高校生では判断できないが最も多く、その信頼性はかなり減少している。しかし、大学生では1996年調査の東京の高校1年生とほぼ同じであり、大学での学びが科学・技術への信頼を向上させていると判断できる。

Q08 人類は他の生物とは異なり、自然界の法則から影響を受けていない VS 人類は他の生物とは異なる力を持っているが、自然界の法則の影響を受けている

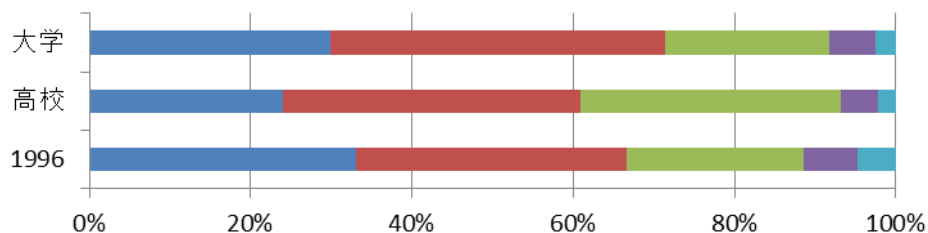
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*人類の生存への自然の寄与を問う項目である： 大学生では自然界の影響を3分の2以上が肯定しており、価値観の中でもかなり高い。前問と同じく、高校生では判断できないが最多で、大学生では1996年調査とほぼ同じ回答が得られており、学習の効果が考えられる。

Q09 人間は環境に合わせて生活するべきである VS 人間の生活に合わせて環境を改変すべきである

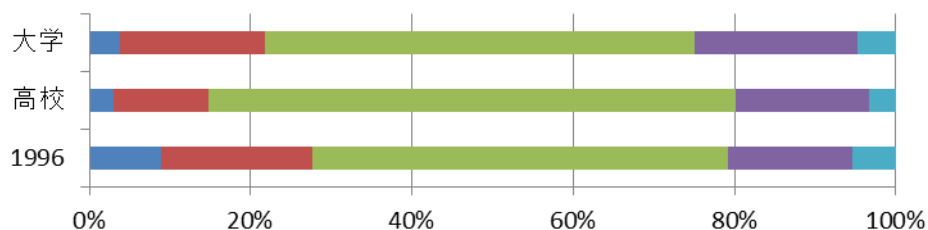
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*人間の生活にとっての環境の重要性を問う項目である： 高校生ではやや環境重視であるが大学生のほうがより環境優先度が高い。大学生のこの値もまた1996年調査と近似した。

Q10 近代技術によって私達の自由と独立は減少してきている VS 近代技術によって私達の自由と独立は、より確かなものとなってきている

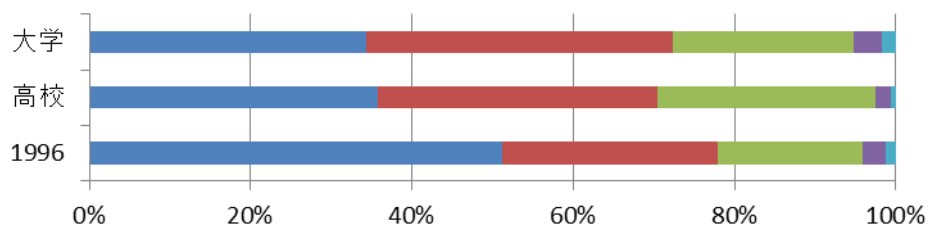
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*人間の生活にとっての環境の重要性を問う項目である： 高校生も大学生も60%近くが技術の価値評価をし得ていない。それは1996年調査でも同様であり、比較対象である生活上の自由や独立についてのユースの観念が薄いためであろう。日本の教育の中で培われてこなかった生活面の学習の欠如の現われではないか。

Q11 天然資源は将来の世代の利益のために残しておくべきである VS 天然資源は現在の世代の利益のために使われるべきである

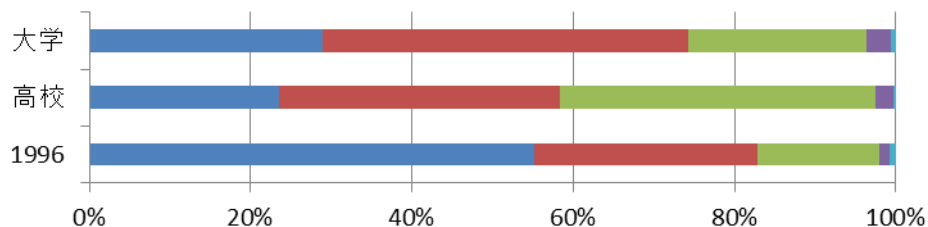
①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*天然資源の使用を問う項目である： 「資源は将来世代のため」と肯定する回答は、価値観を問う14の課題の中で高校生、大学生共に70%前後で最も高かった。半分は将来世代と自認できるユースの特性といえるのではないかと。1996年調査でも高い肯定が得られており、時代を超えたユースの特性といえる。

Q12 先進工業国は自然のバランスを損なっている VS 自然のバランスは先進工業国の影響ではびくともしない

①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成

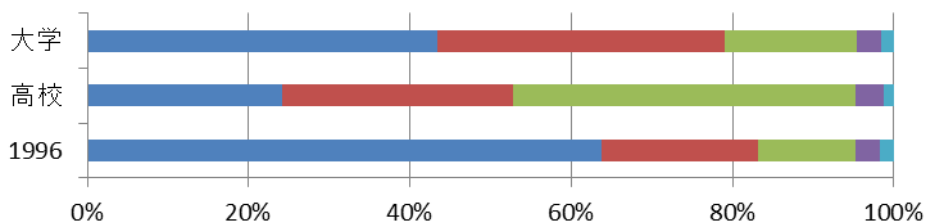


*自然のバランスの現状認識を問う項目である： 自然破壊の主因は先進国であるという認識が肯定されている。1996年調査では①の回答が55%とより高く環境危機感が高かった時代であったと思われる。

Q13 地球は限られた資源と居住空間しか持たない宇宙船のようなものである VS 地球は巨大でほぼ無限

の資源と居住空間を持っている

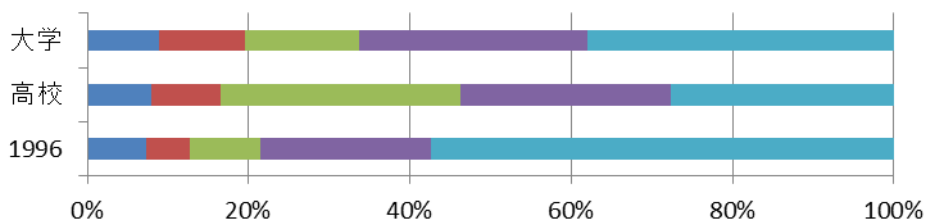
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*宇宙船地球号の認識を問う項目である： 宇宙船地球号という認識は3分の2以上と高い。1996年調査では①の回答が64%と最多であり現在より環境危機感が高かったのであろう。

Q14 人間が生き残るためには自然をコントロールすることを学ばなくてはならない VS 人間が生き残るためには自然との調和を保つことを学ばなくてはならない

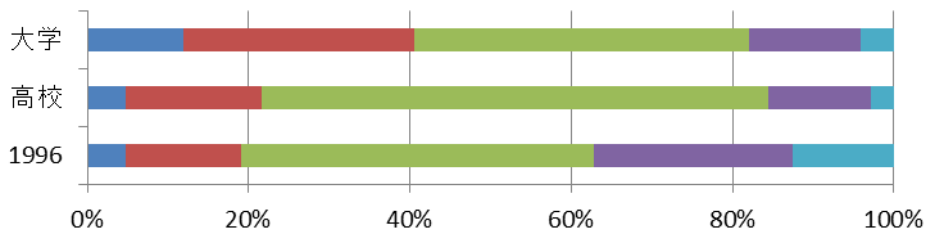
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*自然をコントロールするか調和すべきかものかを問う項目である： 自然との調和を重視する意見が自然のコントロールより3倍もある。1996年調査では調和の回答が57%と最多であり、これも当時の環境危機感の高さの反映ではないだろうか。

Q15 科学技術は問題の解決を見いだす VS 科学技術は解決するより以上に多くの問題を生む

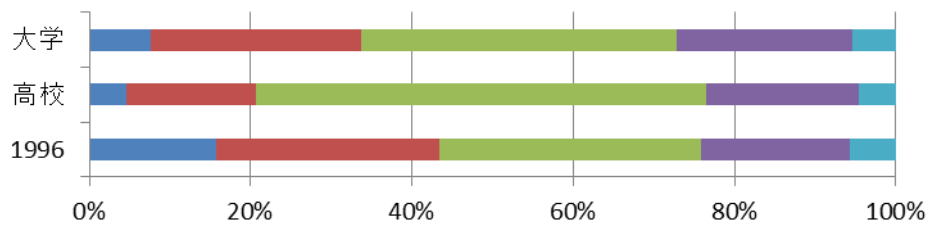
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*科学の評価を問う項目である： いずれとも評価できない回答がQ10に次いで最も多かった。これは1996年調査でも同じであり、技術そのものやその生活への功罪についての理解が不足していて、判断ができないためと思われる。これらは環境教育として重要なテーマにすべき課題であろう。

Q16 人間はまちがいをおかす可能性があるのもので技術は危険なものである VS 常に改良し続けることによって技術を実質的に危険のないものにできる

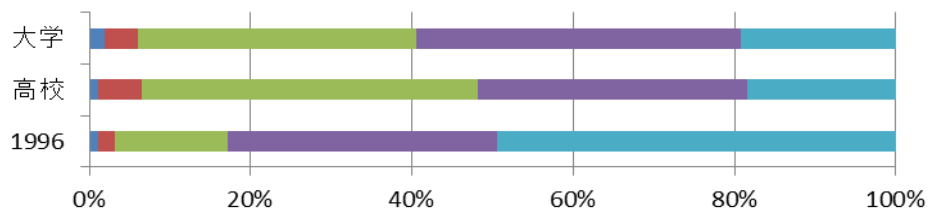
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*技術の評価を問う項目である： Q16、Q10 と同様に判断できないとの意見が最多で、技術に対する功罪の理解が不足している。

Q17 環境の保全よりも経済成長が優先されるべき VS 経済成長よりも環境の保全が優先されるべき

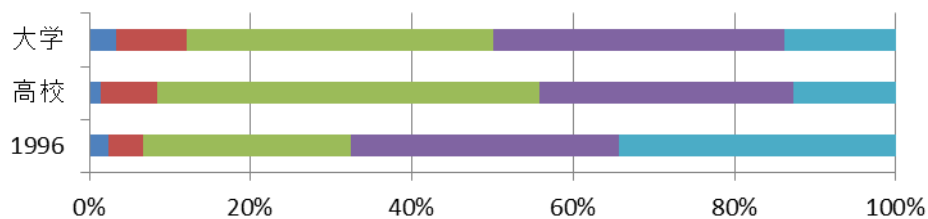
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*環境保全と現状認識を問う項目である： 環境保全を優先する意識が半数以上だが、判断できないとの意見も半数近くある。しかし、1996年調査では「保全優先」が半数あり、全く異なった回答となっている。これ17年というのは時代差なのか東京と長野の地域差なのか本調査では判明しないが興味深い差異である。

Q18 人間が必要とする物を作るために自然は使われるべき VS 自然はそれ自身のために守られるべき

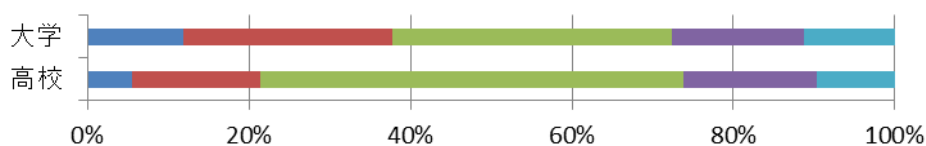
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*自然の価値を問う項目である： 自然保護を優先する意識が半数近いが、判断できない意見が最も多く、価値観は定まっていない。1996年調査では自然保護の回答が最多であり、Q17同様、今回調査とは大きく異なっているがその理由は不明である。

Q19 原子力発電はエネルギー確保のために必要 VS 原子力発電は危険なので廃止すべき

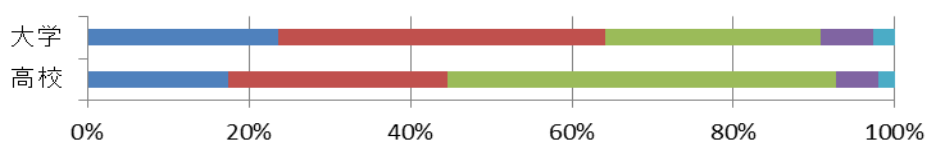
- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*3.11 後に対する今回の独自項目である。判断できないが高校生、大学生ともに最も多く、原発の功罪に対する認識や判断は十分ではない。高校生に比べて大学生では功罪の判断は分散しており、知識を得るにつれそれぞれの認識が形成されつつあるといえる。

Q20 地域の土や農業は大切であり地産地消を進めるべき VS 農業も世界規模で適作を行い貿易を進めるべき

- ①左に強く賛成 ②左に賛成 ③どちらとも ④右に賛成 ⑤右に強く賛成



*地産地消のユースの認識を問う今回調査の独自項目である： 高校生では不明が最も多く、語の意味を理解できていないが、大学生では肯定的にかなり普及している。

まとめ

環境価値観は様々な課題に関連するが、上記 14 項目はその回答傾向から、以下の 4 群に区分される。

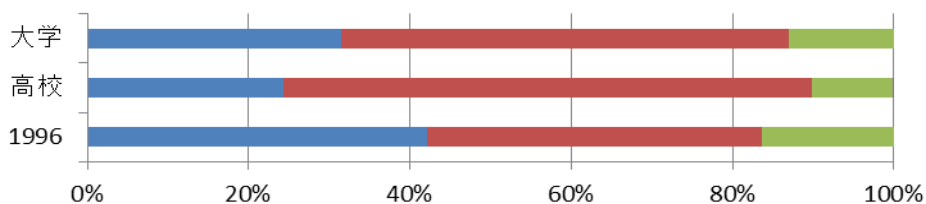
- ①Q10,15,19 の「どちらでもない」が最多の群： 判断不能が 50%以上と大半であり価値判断がほとんどできない。原発のようにいずれも技術の功罪を問う項目で、明確な判断基準を持ち得ていないことが回答からわかる。その理由は、高校生に比べて大学生ではやや左右に回答が分散することから、技術の功罪に関して知識を得ることで価値判断が次第に増加するのではないかと思われる。
- ②Q11,13, 14 の肯定的な認識が明瞭な群： 「資源は将来世代のために」や「宇宙船地球号」、「自然のコントロールより調和を」のような理念的な課題に対してはかなり高い肯定認識が回答されている。
- ③Q8,17,18 の弱い肯定的認識の群： 自然や環境を保全すべきではあるが経済や人間生活など具体的なものと比較においては肯定感がやや弱くなる傾向がある。自然や環境を抽象的に学んだり考えたりするのではなく、人間生活との関連において学習することで環境認識が高まることが期待できる。
- ④Q7,9,12,16,20 の高校生より大学生で肯定感が高まる群： 高校生から大学生になると肯定感がかなりは向上する群で、先の判断できない課題群にも近い。判断には多少とも知識を必要とする課題であり、環境教育で取り扱うことでより高い教育効果が期待できる。

4. 環境配慮活動の実践の程度： 以下の 10 項目が 1996 年調査で実施された。

以下、回答は、①過去 1 年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない、の 3 択である。

Q21 環境に配慮して作られた家庭用品を選ぶ

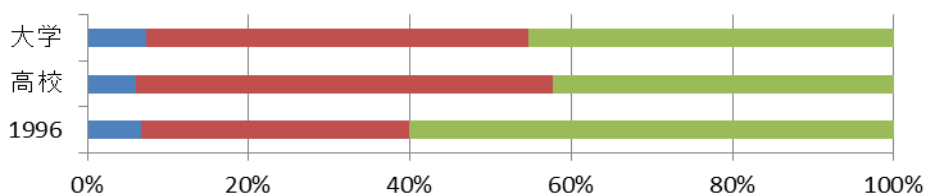
- ①過去 1 年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*ユースは家庭用品を購入する機会が少ないため実践は少ないが、今後の意欲は高い。1996年の東京の高校生調査では実践したが最も高い割合を示しており、本調査での近年の長野のユースでかえって実践は減少しているのは心配である。

Q22 環境の保護や改善のための集まりに参加したり、署名活動をしたり、手紙を書いたりする

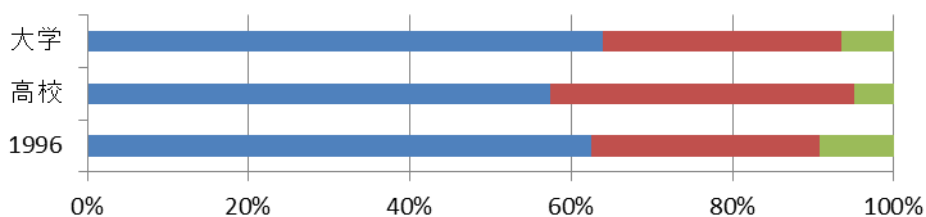
- ①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*実践は7%ほどと極めて少ないが、必要性50%以上とかなり意識されてはいる。1996年調査より意欲が高くなっているのは様々な環境活動が身近でも見聞きするようになってきたためではないだろうか。

Q23 環境に配慮して、ものを捨てずに何度も使ったり、リサイクルしたりする

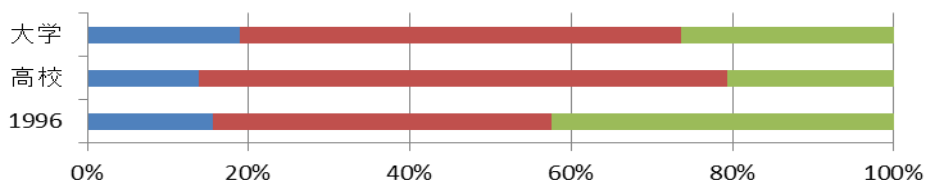
- ①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*リサイクル活動は1996年調査でも今回でも60%以上と極めて高く、学校や社会での環境キャンペーンなどの影響ではないだろうか。

Q24 環境に良くないと思われる行動を変えるようまわりの人に働きかける

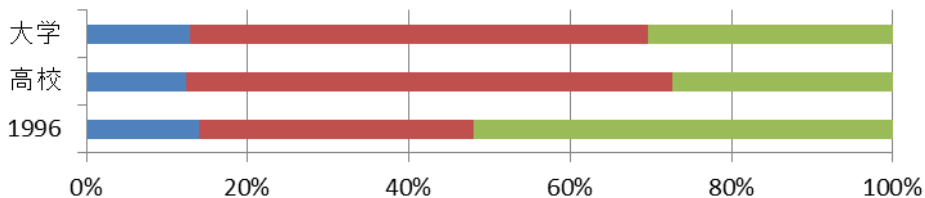
- ①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*実践は20%以下と低いのは意見表明が苦手なことの現われではないか。しかし、その必要性の認識と意欲はかなり高く、1996年調査より向上している。

Q25 環境美化活動や散乱ゴミ防止活動に参加する

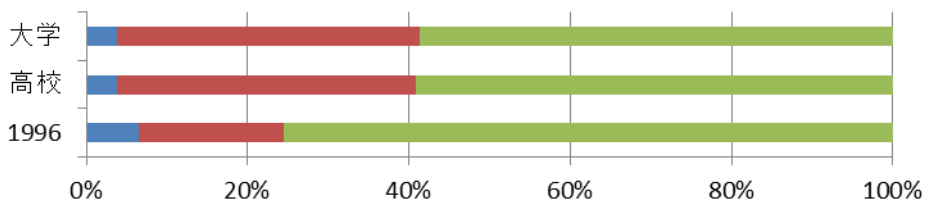
- ① 去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*高校や大学などではほとんど実践されていないことの反映であろう。しかし、その必要性和実践の意欲はかなり高い。近年の小学校などではかなり実践されているはずなので継続する必要があるだろう。

Q26 環境に良くないと思ったことをレポートしたり告発したりする

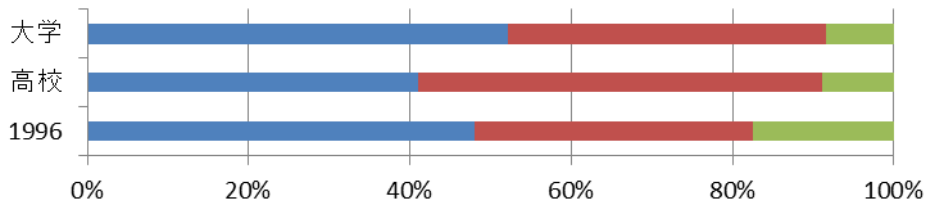
- ①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*社会に向けての活動は5%以下とやはり極めて消極的である。しかし、1996年調査より今後やろうと思う割合は倍増しており社会的活動の必要性の認識は極めて高くなっていると判断できる。

Q27 環境に配慮して水の使用量を減らす努力をする

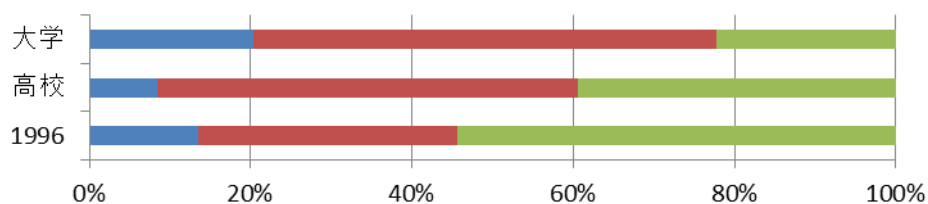
- ① 過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*節水は学校、大学の校内ではいたるところに表示があり、実践の普及度は50%前後と極めて高い。しかし、1996年調査とほぼ同率であり進展が少ないとも考えられる。

Q28 環境保護に関係すると思われる話題について、自分の興味に応じて情報収集をする

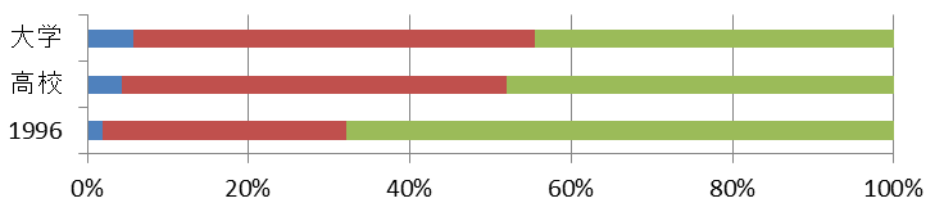
- ①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない



*実践率は低いですが、その必要性と意欲はかなり高い。1996年調査よりも高いのはインターネットの普及など情報環境の向上によるものと思われる。

Q29 植林活動に参加する

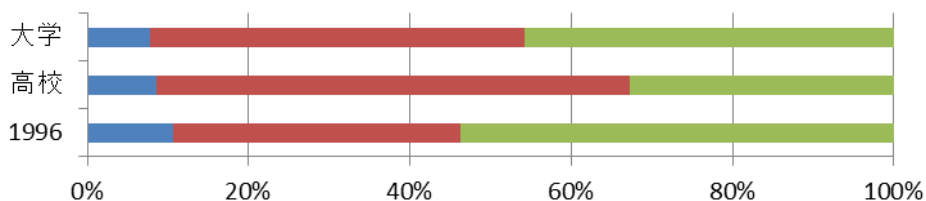
- ① 去1年で行なった ② 今後やろうと思う ③ やらない



*植林は実践率は6%と極めて低いのは実践する機会が少ないからだろう。しかし、必要性と意欲は50%以上とかなり高く、かつ1996年調査よりかなり高い。

Q30 環境保全に関わっている団体などに寄付をする

- ① 過去1年で行なった ② 今後やろうと思う ③ やらない



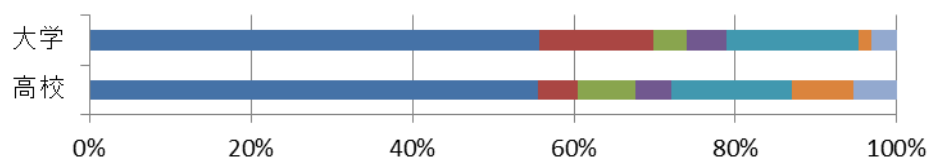
*ユースでは実践しにくい課題だが、その必要性と意欲は50%とかなり高いのは注目される。社会的関心への向上によるものであろうか。

まとめ

これらの実践課題は高校生でも大学生でもほとんど同傾向であり、知識の多寡によって実践率が上がるわけではない。一方でやろうと思うという意欲は高校生のほうが大学生より全般に高く、必要性の認識や意欲があるといえる。大学生での意欲の向上を図ることが必要である。

5. 環境を守る上で最も重要な役割を担っているのは、

- Q31 ① 国民 ② 事業者 ③ 民間団体 ④ 地方公共団体 ⑤ 国 ⑥ その他 ⑦ わからない

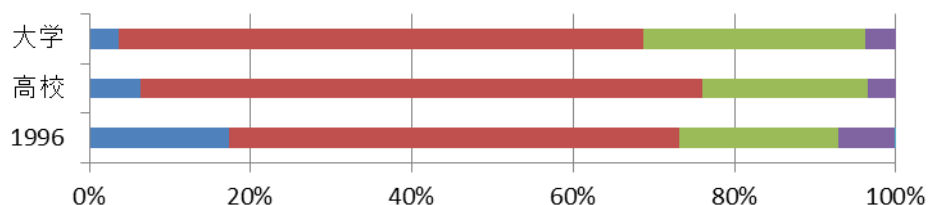


* 「国民」が60%以上であり、環境保全は社会全体でとの意識が大半である。これは環境省の全国調査の46%よりはるかに高く、長野県の特徴である。

6. 小・中学生時代の環境学習

Q32 環境問題はどのくらい取り上げられていましたか。

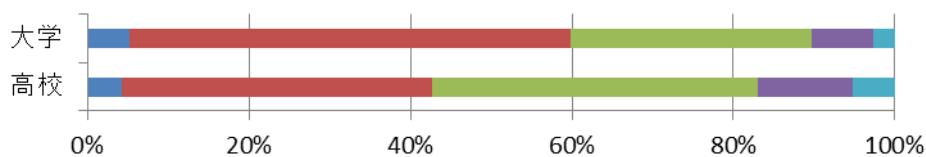
- ①取り上げられていない ②1年に数回くらい ③1ヶ月に1回くらい ④1週間に1回くらい



*環境教育は全小中学校で実施されているが、生徒の側からは実施されていると認識されていない。学校で実施されるゴミ拾いなどの実践もゴミはなぜ発生するのか、など適切な学習を伴わないと環境教育にはならないのであろう。1996年調査よりは実施率は高くなっており、学校での環境教育は徐々にではあるが認識されつつあるといえる。

Q33 環境学習で学んだことを実行しましたか。

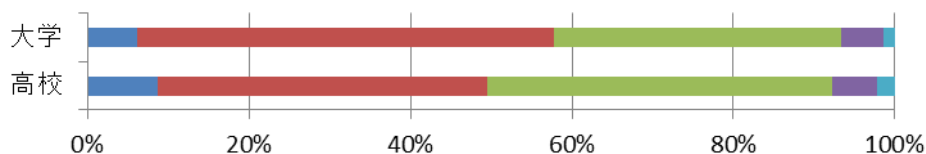
- ①かなり実行した ②少し実行した ③普通 ④あまりしていない ⑤していない



* 「少し実行」が50%前後でかなりな教育効果があったといえるだろう。前問 Q32 で学習機会は少ないにもかかわらず実行率が高いのは生徒の関心が高い学習事項であるのではないだろうか。

Q34 環境学習は生活や知識として役に立っているか。

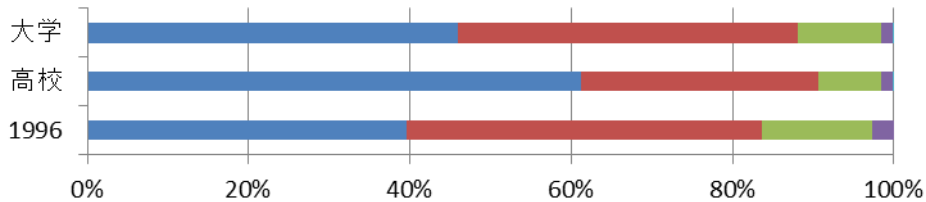
- ①かなり役立っている ②役立っている ③普通 ④あまり役立っていない ⑤役立っていない



*普通までを肯定意見とすると90%以上がかなり役立つと評価している。これは環境教育の意義が高いことを示しているだろう。

7. 環境について友達や家族とどのくらい話し合っているか

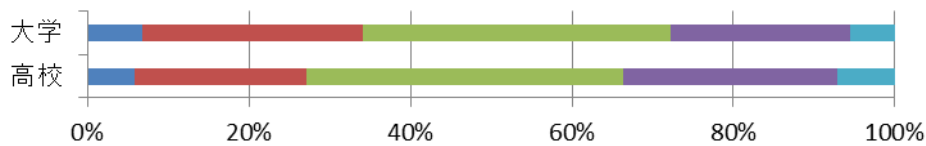
Q35 ①話し合っていない ②1年に数回くらい ③1ヶ月に1回くらい ④1週間に1回くらい



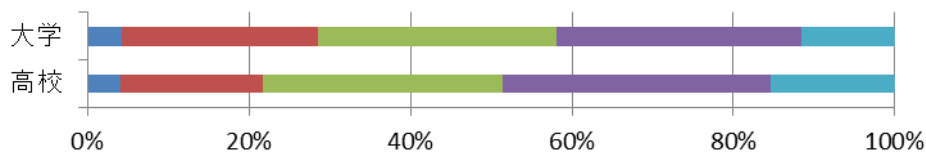
*話題になることがないのが半数以上であるが、話題にすることもありますが半数近くで今後は期待できるのではないだろうか。1996年調査より「いない」が多いのは長野の消極性か。

8. 環境状況の将来の予測： 本アンケートの独自項目である。現状認識と将来予測の関係は意識的な改善行動との関連において興味深い。以下の回答は、①よくなっている ②ややよくなっている ③変わらない ④やや悪化している ⑤かなり悪化している、の5択である。

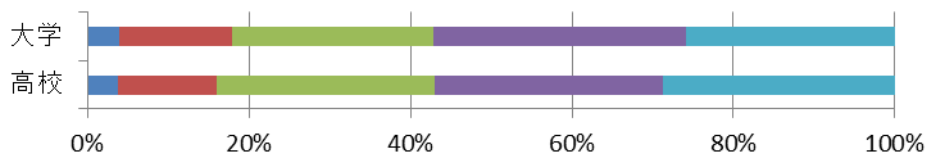
Q36 地域レベル (長野市)



Q37 国レベル (日本全体)



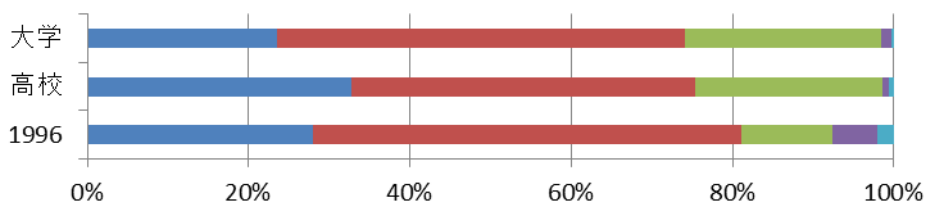
Q38 地球レベル (世界全体)



*広域レベルになるほど悪化の予測が多くなるのは近年の意識と同じであるが、悪化の予測は改善予測の倍もあり、依然として悲観が楽観を上回っている。しかし、Q4~6の現況の意識で最も多かった「変わらない」はいずれのレベルでも減少し、将来予測は改善と悪化の両端が増加しており、意識の分極化が見られる。

9. 環境の改善をどのくらい望んでいるか。

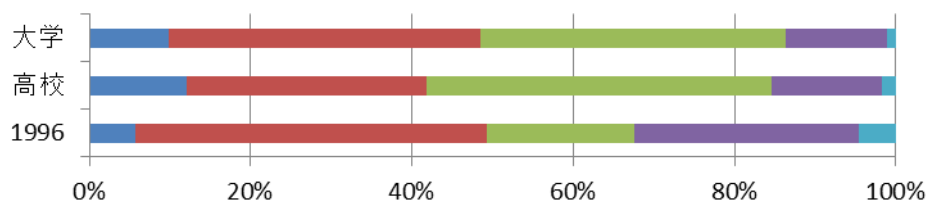
Q39 ①非常に強く望む ②強く望む ③普通 ④あまり望まない ⑤全く望まない



*環境の現状や将来予測での悪化に対応して、改善を求める意見は高校生でも大学生でも 75%近い。1996年調査と比べてもほぼ同じく程度が維持されている。

10. 環境を守ったりより良くするのに役に立つ知識や力が自分にあると思うか

Q40 ①非常にそう思う ②そう思う ③普通 ④あまりできない ⑤全くできない



*自己効力感が普通というやや消極的の回答が最も多く、環境改善への積極的な意欲や力がユースには弱い。前問の改善への高い願望に比べてそれを実現する力である自己効力感とは十分とは言えない。また、改善への意欲と自己効力の相関係数は 0.3 程度で関連はみられない。この力をつけるのも環境教育の大きな課題であろう。

おわりに

・本調査は 2013 年の長野県民である高校生と長野県出身者が 40%の信州大学の教育学部・工学部学生の回答であり、年代や地域には偏りがあり、それらについては今後の調査の課題としたい。

・1996 年の「アジア・太平洋地域の青年と環境調査」を過去との比較のため使用したが、対象ユースが東京のため、本調査とは年代と地域が異なったため、その差が時代か地域によるものなのか十分には分析できなかった。今後とも各種資料とも比較検討をおこない、当地におけるより良い環境教育の実践のための研究資料としていきたい。

付表。ユースの環境意識アンケート（2013年度）

このアンケートは、若い人達の環境に関する態度、知識、行動を調べようとするものです。試験ではありませんので、名前を書く必要はありません。調査の結果は統計的に処理し、個人の回答を公表することはありません。

他の人と相談せずに、自分の思うとおりに、わかる範囲で回答して下さい。

1. あなた自身について、当てはまる番号に○をしてください。

Q01 出身高校： ①長野県・②北海道東北・③関東甲越・④東海北陸・⑤関西中国・⑥四国九州

002 性別： ①男・ ②女

Q03 小・中学生時代の主な生活環境： ①住宅地 ②商工業地 ③農村 ④山村 ⑤その他
()

2. あなたは、近年の環境の状況についてどのような実感をお持ちでしょうか。(1)地域レベル、(2)国レベル、(3)地球レベルで、あなたの実感に最も近い番号に○をしてください。

①よくなっている ②ややよくなっている ③変わらない ④やや悪化している ⑤かなり悪化している

Q04 地域レベル（長野市でみて） 1-2-3-4-5

Q05 国レベル（日本全体でみて） 1-2-3-4-5

Q06 地球レベル（世界全体でみて） 1-2-3-4-5

3. 各問題に対する異なった見方にどの程度賛成ですか、あなたの考えに最も近い番号に○をしてください。

①左の意見に強く賛成 ②左の意見に賛成 ③どちらともいえない ④右の意見に賛成 ⑤右の意見に強く賛成

Q07 科学と技術が私達の生活を良く ← 1 2 3 4 5 → 科学と技術が私達の生活を悪くした

Q08 人類は他の生物とは異なり、自然 ← 1 2 3 4 5 → 人類は他の生物とは異なる力を持つているが、自然界の法則の影響を受けていない

Q09 人間は環境に合わせて生活する ← 1 2 3 4 5 → 人間の生活に合わせて環境を改変すべきである

Q10 近代技術によって私達の自由と ← 1 2 3 4 5 → 近代技術によって私達の自由と独立は減少してきている

Q11 天然資源は将来の世代の利益の ← 1 2 3 4 5 → 天然資源は現在の世代の利益のために残しておくべきである

Q12 先進工業国は自然のバランスを ← 1 2 3 4 5 → 自然のバランスは先進工業国の影響ではびくともしない

Q13 地球は限られた資源と居住空間 ← 1 2 3 4 5 → 地球は巨大でほぼ無限の資源と居住空間を持っている

- Q14 人間が生き残るためには自然を ← 1 2 3 4 5 → 人間が生き残るためには自然との調和を保つことを学ばなくてはならない
- Q15 科学技術は問題の解決を見いだす ← 1 2 3 4 5 → 科学技術は解決するより以上に多くの問題を生む
- Q16 人間はまちがいをおかす可能性 ← 1 2 3 4 5 → 常に改良し続けることによって技術を実質的に危険のないものにできる
- Q17 環境の保全よりも経済成長が優先されるべきである ← 1 2 3 4 5 → 経済成長よりも環境の保全が優先されるべきである
- Q18 人間が必要とする物を作るために自然は使われるべきである ← 1 2 3 4 5 → 自然はそれ自身のために守られるべきである
- Q19 原子力発電はエネルギー確保のために必要である ← 1 2 3 4 5 → 原子力発電は危険なので廃止すべきである
- Q20 地域の土や農業は大切であり ← 1 2 3 4 5 → 農業も世界規模で適作を行い貿易を進めるべきである

4. 以下の活動をこの1年間で行いましたか、当てはまる番号に○をしてください。

①過去1年で行なった ②今後やろうと思う ③やらない

- Q21 環境に配慮して作られた家庭用品を選ぶ----- 1-2-3
- Q22 環境の保護や改善のための集まりに参加したり、署名活動をしたり、手紙を書いたりする --- 1-2-3
- Q23 環境に配慮して、ものを捨てずに何度も使ったり、リサイクルしたりする----- 1-2-3
- Q24 環境に良くないと思われる行動を変えるようまわりの人に働きかける----- 1-2-3
- Q25 環境美化活動や散乱ゴミ防止活動に参加する----- 1-2-3
- Q26 環境に良くないと思ったことをレポートしたり告発したりする----- 1-2-3
- Q27 環境に配慮して水の使用量を減らす努力をする----- 1-2-3
- Q28 環境保護に関係すると思われる話題について、自分の興味に応じて情報収集をする----- 1-2-3
- Q29 植林活動に参加する----- 1-2-3
- Q30 環境保全に関わっている団体などに寄付をする----- 1-2-3

5. 環境を守る上で最も重要な役割を担っているのは、以下のどれだと思いますか。当てはまる番号1つに○をしてください。

- Q31 ① 国民 ② 事業者（企業・産業界） ③ 民間団体（地域団体や環境団体） ④ 地方公共団体（県や市町村） ⑤ 国（政府） ⑥ その他（ ） ⑦わからない

6. 小・中学生時代の環境学習の実態について、当てはまる番号に○をしてください。

Q32 環境問題はどのくらい取り上げられていましたか。

①取り上げられていない ②1年に数回くらい ③1ヶ月に1回くらい ④1週間に1回くらい

Q33 環境学習で学んだことを実行しましたか。

①かなり実行した ②少し実行した ③普通 ④あまりしていない ⑤していない

Q34 環境学習は生活や知識として役に立っていますか。

①かなり役立っている ②役立っている ③普通 ④あまり役立っていない ⑤役立っていない

7. あなたは学校以外で、このアンケートで尋ねたような問題を、友達や家族とどのくらい話し合っていますか。次のうち該当するものを1つ選び、当てはまる番号に○をしてください。

Q35 ①話し合っていない ②1年に数回くらい ③1ヶ月に1回くらい ④1週間に1回くらい

8. あなたは、将来（約15年後）の環境状況についてどのように予測しますか。

①よくなっている ②ややよくなっている ③変わらない ④やや悪化している ⑤かなり悪化している

Q36 地域レベル（長野市のみ） 1-2-3-4-5

Q37 国レベル（日本全体のみ） 1-2-3-4-5

Q38 地球レベル（世界全体のみ） 1-2-3-4-5

9. 環境の改善をどのくらい望んでいますか。あなたの考えに最も近い番号に○をしてください。

Q39 ①非常に強く望む ②強く望む ③普通 ④あまり望まない ⑤全く望まない

10. どんな小さなことであれ、環境を守ったりより良くするのに役に立つ知識や力が自分にあると思いますか。当てはまる番号に○をしてください。

Q40 ①非常にそう思う ②そう思う ③普通 ④あまりできない ⑤全くできない

ご協力ありがとうございました。